

# PARNASSIUS

No. 40

## 目 次

|                      |             |    |
|----------------------|-------------|----|
| 淡路島の甲虫相 .....        | 高橋 壽郎 ..... | 1  |
| クロコノマチョウの飼育 .....    | 谷川 大海 ..... | 7  |
| コムラサキの飼育 .....       | 谷川 大海 ..... | 10 |
| ウスイロコノマチョウ飛び来る ..... | 谷川 大海 ..... | 13 |
| 淡路島未記録の蜂類 .....      | 大草 伸治 ..... | 13 |
| 1993 年夏の成果 .....     | 交告 尚史 ..... | 14 |
| 一宮町でイカリモンガを採集 .....  | 大草 伸治 ..... | 15 |
| コシロシタバの採集記録 .....    | 堀田 久 .....  | 15 |
| 1月に活動するベニシジミ .....   | 堀田 久 .....  | 16 |
| ツクツクボウシの遅い記録 .....   | 登日 邦明 ..... | 16 |

淡 路 昆 虫 研 究 会

ENTOMOLOGICAL ASSOCIATION OF AWAJI

HYOGO JAPAN

February 1994



# 淡路島の甲虫相\*

高橋 壽郎<sup>1</sup>

Coleoptera Fauna of Awaji Is., Hyogo Prefecture

Toshio Takahashi

## はじめに

淡路昆虫研究会創立 10 周年に機関誌“PARNASSIUS”も No.16 を創立 10 周年記念号として出版された (1976)。筆者はその時“淡路島の甲虫相”を発表して頂いた (p.3-9)。

その後筆者自身も何回か淡路島を訪れ調査採集をやり淡路島新記録の甲虫を得たりした。また淡路島在住の方々による淡路島からの甲虫の記録もかなり多くある。そこで今回ふたたび現時点での淡路島の甲虫相をここにまとめて見ることにした。多くの淡路島産甲虫についての文献からはできるだけその記録を取り入れるようにした。それらの文献については此処での発表を省略させていただき筆者が別途発表している次のものを参照いただきたい (兵庫県産甲虫類に関する文献目録, 1975。同改訂版, 1981。同追加篇 I, 1984。同追加篇 II, 1993—全部で 1,830 篇を収録)。

なにぶんにも筆者の浅学, 不勉強により同定の誤りその他があるかも知れない。それらについてご教示, ご指導いただければ幸いである。

筆者が採集した標本は原則として県立“人と自然の博物館”に保管されている。

末筆にあたり本文発表の機会を与えて下さった登日邦明氏に厚く御礼申し上げる。

## 淡路島の甲虫類

淡路島に産する甲虫類で現在記録されている科別の種類数と現時点で同島にのみ産すると考えられる種名 (兵庫県下で他に記録の無い種) を記し, 注目すべき種に若干の解説を試みた (種数の括弧内の数は兵庫県産の種類数・番号は便宜的につけたものである) (淡路島産甲虫類の目録はもちろん作成してあるがあまりに長文になるので此処での発表を省略したことを御了承頂きたい)。

### 1. Family Cupedoidae ナガヒラタムシ科 1 種 (2)

前回の報文では記録がなかった。現存するコウチュウ目のうちでも起源がもっとも古く, 古生代二疊紀下部 (約 2 億年前) に遡るものといわれている。今回 1 種淡路島にもいることが記録された (堀田, 1978)。

### 2. Family Rhysodidae セスジムシ科 1 種 (2)

この科のものは前報以後新しい追加種は見られない。

### 3. Family Paussidae ヒゲブトオサムシ科 1 種 (1)

### 4. Family Cicindelidae ハンミョウ科 3 種 (10)

ヨドシロヘリハンミョウの産が前報以後も確認できていない (沼島産はシロヘリハンミョウではないのかという考え方もある)。

\*: 兵庫県昆虫資料・285

1: 〒652 神戸市兵庫区氷室町 1-44

5. Family Carabidae オサムシ科 64種 (304)

前回の報告からすれば倍近くに増えている。前報文でアキオサムシとして先山産のヒメオサムシを紹介したが 1993 年に淡路島に産するものはアワジヒメオサムシ *Carabus japonicus awajensis* Imura, Dejima et Mizusawa, 1993 として記載された。Holotype, Paratypes 全部洲本市先山産である。筆者も先山で冬期採集で掘り出したことがある。先山での個体数はそれほど少ないとも思われない。今のところこの亜種は先山産が知られているだけのようである。淡路島には他にオオオサムシ、ヤコンオサムシも産する。このアワジヒメオサムシが先山にだけいる種なのかどうかもう少し調べる必要がありそうである。

オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus* Olivier, 1795. 前報文で説明したように兵庫県の瀬戸内側海岸線沿いでの分布が絶望的な現在淡路島での棲息が大いに期待される所であるが最近出版された”淡路島版レッド・データ・ブック第1集”によると南淡町での棲息もかなり心配な状況にあるようだ。

オノコロメクラチビゴミムシ *Trechiana onokoro* S. Ueno, 1983. 上野俊一博士によって淡路島南部産で新種記載されたゴミムシである。タイプの産地は Ayuya gawa Valley (洲本市鮎屋川), Nariaigawa Valley (三原町成相川) でももちろん淡路島特産種である。

カギモンミズギワゴミムシ *Bembidion poppii phohlai* Kirschenhofer, 1984. 前川和昭氏が安乎産 lex. を *Bembidion poppii* Netolitzky の学名で記録しておられる (1983)”日本産昆虫総目録 1.1989”によると前記学名になっている。今のところ兵庫県下での記録はこれがあるのみである。

ヤシロホソヒラタゴミムシ *Trephionus chujoi* Habu, 1961 が三原郡諭鶴羽山からある (久松, 1973. Habu, 1978)。今の所県下からはこの産地が知られているだけである。

6. Family Brachinidae ホソクビゴミムシ科 2種 (16)

今回新たに2種の記録が見られた。ともに兵庫県下に広く分布している種である。

7. Family Haliplidae コガシラミズムシ科 2種 (6)

1種増えている。

8. Family Dytiscidae ゲンゴロウ科 10種 (40)

前報より6種増えている。特に問題になる種は前報のスジゲンゴロウ以外無い。

9. Family Gyrinidae ミズスマシ科 3種 (7)

10. Family Hydrophidae ガムシ科 8種 (36)

前報より6種増えた。特に問題になる種はない。

11. Family Histeridae エンマムシ科 7種 (43)

12. Family Ptiliidae ムクゲキノコムシ科 2種 (2)

前報と変化はないが前回エビチャハバネムシの和名で紹介したもののエビチャムクゲキノコに変える。

13. Family Leiodidae タマキノコムシ科 2種 (17)

変わらない。但し前報で常隆寺山で採集した lex. をヒトツメタマキノコムシ *Liodopris maculicollis* Nakane としたものはツヤマルタマキノコムシ *Agathidium sublaevigatum* Portevin, 1908 と同定すべきで此処に変更しておく。この種は県下に広く分布している。

14. Family Silphidae シデムシ科 8種 (17)

前報には記録がなかった。8種あるがどれも普通に見られるものである。

15. Family Staphylinidae ハネカクシ科 14種 (290)



前報とほぼ同じようなことで調査不充分の科である。

16. Family Pselaphidae アリツカムシ科 4種 (27)

17. Family Scaphidiidae デオキノコムシ科 1種 (28)

18. Family Lucanidae クワガタムシ科 8種 (17)

前報より 1 種増えた。増えた 1 種はマメクワガタ *Figulus punctatus* Waterhouse, 1873 である。この種は台湾から琉球列島、九州、対馬、四国の太平洋岸、本州では紀伊半島、伊豆諸島などに分布する種であり兵庫県下では沼島と家島の 2 カ所が知られている。沼島に定着しているのか流木などによって運ばれたものかもう少し調べないとわからない。

19. Family Geotrupidae センチコガネ科 1種 (3)

20. Family Scarabaeidae コガネムシ科 56種 (151)

種類としては 10 種ほど増えたが特に問題になる種はいないように思われる。前回ハラゲヒロウドコガネ *Nipponoserica pubivetrus* Nomura, 1976 と報告したもの交尾器を詳しく調べて見た所 *Nipponoserica similis* (Lewis, 1895) カバイロヒロウドコガネとすべきではないかと考えているが、材料が充分にないので今ひとつ自信がない。吹上浜にシロスジコガネ *Polyphylla albolineata* (Motschulsky, 1861) を多く産すると報告されていたが、現在どのような状況なのか最近の情報を知らない。兵庫県全般であまり採集されていない種のようなのである。

21. Family Ptilodactylidae ナガハナノミ科 1種 (7)

22. Family Psephenidae ヒラタドロムシ科 1種 (7)

23. Family Buprestidae タマムシ科 12種 (81)

24. Family Elateridae コメツキムシ科 16種 (136)

25. Family Trosidae ヒゲブトコメツキ科 1種 (3)

26. Family Eucnemidae コメツキダマシ科 1種 (15)

27. Family Ometheidae ホタルモドキ科 1種 (2)

28. Family Cantharidae ジョウカイボン科 9種 (40)

29. Family Lycidae ベニボタル科 1種 (36)

30. Family Dermestidae カツオブシムシ科 3種 (16)

31. Family Anobiidae シバンムシ科 3種 (18)

前報と変わりはない。前報で述べたようにセスジタワラシバンムシ *Holcobius japonicus* (Pic. 1903), ツガタケミゾキノコシバンムシ *Mizodorcatoma pinicola* (N. Hayashi, 1951) の 2 種はその後兵庫県下での記録は見られず、淡路島 (先山, 三熊山) からのみ知られている種である。

32. Family Ptinidae ヒョウホンムシ科 2種 (4)

33. Family Trogostidae コクヌスト科 1種 (5)

34. Family Melyridae ジョウカイモドキ科 2種 (12)

何れも新たに記録されたものであるが、ごく普通に産するものばかりである。

35. Family Nitidulidae ケシキスイ科 14種 (87)

2 種増える。淡路島からのみ記録されている種はウスチャデオキスイ *Carpophilus freemani* Dobson, 1956 (三原郡福良) のみとなった。

36. Family Cybocephalidae タマキスイ科 1種 (1)

37. Family Phalacridae ヒメハナムシ科 1種 (13)

38. Family Cucujidae ヒラタムシ科 1種 (14)

39. Family Silvanidae ホソヒラタムシ科 5種 (1)
40. Family Cryptophagidae キスイムシ科 3種 (16)
41. Family Helotidae オオキスイムシ科 1種 (2)
42. Family Biphyllidae ムクゲキスイムシ科 1種 (8)
43. Family Languriidae コメツキモドキ科 1種 (9)
44. Family Erotylidae オオキノコムシ科 1種 (31)
45. Family Corylophidae ミジンムシ科 2種 (7)  
 以上何れも前報以後追加種を知らない。
46. Family Endomychidae テントウダマシ科 4種 (9)  
 前報より2種増えたがいずれも一般的に知られている2種とやや個体数が少ない種と考えられるクリバネツヤテントウダマシ *Lycoperdina gorhami* (Lewis, 1874) 淡路島以外県下では神戸市の産が知られている位である。また久松博士が福良から記録されている *Geoendomychus* sp. も注目しなくてはいけない。
47. Family Coccinellidae テントウムシ科 18種 (73)  
 2種増えたが特に珍しいものではない。前回述べたようにムモンヒメテントウ *Nephus kompirasanus* (H. Kamiya, 1961) は県下では淡路島だけの産が知られている種であるが、今ひとつのオニヒメテントウ *Scymnus (Pullus) gigantus* H. Kamiya, 1961 の方は神戸市内でも最近採集できている。
48. Family Discolomidae ミジンムシダマシ科 1種 (2)
49. Family Lathridiidae ヒメマキムシ科 5種 (13)  
 ウスケシマキムシ *Corticaria japonica* Reitter, 1877 福良 (久松, 1973) は県下からはこの記録があるだけ。  
*Melanophthalma distinguenda* (Comolli) も福良 (久松, 1973) から記録があるが、こちらは県下では宍粟郡音水からの記録がある。
50. Family Mycetophagidae コキノコムシ科 1種 (3)
51. Family Cisidae ツツキノコムシ科 1種 (13)
52. Family Tenebrionidae ゴミムシダマシ科 25種 (93)  
 大きく増加している。主として海岸線沿いの砂地などにいる種が増加した。前報で原記載以後阿万西町での記録しか知らないとしておいたニセハマヒョウタンゴミムシ *Idisia vestita* Marseul, 1876 はその後明石市林崎でも採集できた。  
 ホソハマベゴミムシダマシ *Micropedinus algae* Lewis, 1894 原記載の Kobe 以後産地が知られていなかったが、慶野松原で筆者は採集した。  
 セスジユミアシゴミムシダマシ *Promethis striatipennis* (Lewis, 1894) やや中型のゴミムシダマシで本州、九州に分布している種である。煙島で採集されているが (登日, 1982) 県下での記録はこれのみである。
53. Family Lagriidae ハムシダマシ科 4種 (8)
54. Family Alleculidae クチキムシ科 2種 (16)
55. Family Prostomidae デバヒラタムシ科 1種 (1)  
 デバヒラタムシ *Prostomis latoris* Reitter, 1889 が先山から記録されている (堀田, 1978) 今のところ県下での記録はこれがあるだけである。
56. Family Salpingidae チビキカワムシ科 1種 (6)
57. Family Melanodryidae ナガクチキムシ科 1種 (47)
58. Family Mordellidae ハナノミ科 3種 (52)

59. Family Rhipiphoridae オオハナノミ科 1種 (4)
60. Family Meloidae ツチハンミョウ科 3種 (6)  
ヒラズゲンセイ *Cissites cephalotes* (Olivier, 1795) が洲本市金屋から記録されている (登日, 1980)。この種は南方系種で本州からは和歌山県 (紀伊半島)、兵庫県の産地が知られているだけである。兵庫県からはこの洲本市以外に神戸市北区藍那、明石市明石城内、三木市 (分布の北限) で記録がある。
61. Family Oedemeridae カミキリモドキ科 4種 (21)  
フタイロカミキリモドキ *Oedemeronia serularis* (Marseul, 1876) が洲本市由良町から記録されている (堀田, 1978)。本種も南方系種で兵庫県下からは他に家島の記録がある (畑中, 辻, 1974)。
62. Family Anthicidae アリモドキ科 4種 (28)
63. Family Aderidae ニセクビボソムシ科 1種 (6)
64. Family Cerambycidae カミキリムシ科 93種 (290)  
大きく増えている。キイロミヤマカミキリ *Margites fulvidus* (Pascoe, 1858) が洲本市先山から記録されている (金田, 1978)。南方系の種であり兵庫県下では神戸市御影 (関, 1941) と北区藍那で記録並びに採集されているだけである。前報で説明したトゲヒゲトビイロカミキリ、チャイロヒメカミキリはその後の進展がない。  
ツチイロフトヒゲカミキリ *Dolophrads terrenus* Bates, 1884 が諭鶴羽山、洲本市先山から記録されている (田村, 田村, 1988)。クロオビトゲムネカミキリ *Sciades fasciatus* (Matsushita, 1943) は分布地に淡路島が出ている (日本産カミキリ大図鑑, p.504, 1984) 具体的な産地がわからない。県下では城崎郡香住 (高橋, 1976) というのがある。  
ヒメナガヒメルリカミキリ *Praolia citrinipes*, 1884 が洲本市先山から記録されている (金田, 1980)。県下での記録はこれのみと考えられる。
65. Family Chrysomelidae ハムシ科 101種 (295)  
ハムシ科は淡路島では割合と良く調べられているグループのようである。次の種は淡路島以外での産地はあるがいずれにしてもあまり産地の知られていない種である。トゲアシクビボソハムシ *Lema coronata* Baly, 1873。ムラサキアシナガトビハムシ *Longitarsus boraginicolus* Ohno, 1868 (本種のバラタイプに鮎屋産がある)。コミヤアシナガトビハムシ *Longitarsus komiyai* Ohno, 1968。ハツカアシナガトビハムシ *Longitarsus nipponensis* (Siki, 1938)。ウスグロヒゲナガカミナリハムシ *Oglolinia flavicornis* (Baly, 1874)。前報で兵庫県下で淡路島のための種として報告したヘリグロタマノミハムシ *Sphaeroderma ohkubo* Chujo, 1940。シリダコグミトビハムシ *Zipanginia tuberosa* Ohno, 1964 の2種に加えて筆者が松帆の浦で採集したスイバトビハムシ *Mantura clavoreana* Heikertinger, 1921 も今の所県下では淡路島以外に知られていない。
66. Family Anthribidae ヒゲナガソウムシ科 1種 (44)
67. Family Attelabidae オトシブミ科 10種 (55)
68. Family Apionidae ホソクチソウムシ科 3種 (19)  
ケブカホソクチソウムシ *Apion griseopubesens* Roelof, 1874 は福良から記録されていて (宮武, 1973)、現在でも県下で他の記録が見られない。
69. Family Curculionidae ソウムシ科 41種 (263)  
アルファルファタコソウムシ *Hypera postica* (Gyllenhal, 1813) は洲本市緑町、津名町、三原町、西淡町、五色町、一宮町と淡路島には多くの産地が知られている (藤富, 1990) のにもかかわらず県下の本州側では全く記録がない。同属のオオタ

コゾウムシ *Hypera punctatus* (Fabricius, 1775) はごく最近神戸市、三田市に多く見られているがこちらは現在日本では兵庫県産のみのようである。

ミスジマルゾウムシ *Phaeopholus ornatus* Roelofs, 1873 も三原郡福原の記録があるが(宮武, 1973) こちらも今の所県下での産はこれ以外知られていない。クスアナアキゾウムシ *Dyscerus orientalis* (Motschulsky, 1866) も洲本市先山(堀田, 1975)での記録以外県下での記録は見られない。

70. Family Rhychophoridae オサゾウムシ科 4種 (15)

71. Family Scolytidae キクイムシ科 1種 (47)

以上淡路島産の甲虫類として現在わかっているのは 71 科 616 種である。これに見合う兵庫県産の種類は 71 科 3,037 種ということになる。現在筆者の手元にまとめられている兵庫県産甲虫類というのは 113 科 3,199 種(科数、種数が違うのは兵庫県には淡路島から記録が無い科並びにそれに属する種がいるからである)。

前にものべたが兵庫県産甲虫類の約 20 % 程度が淡路島から記録されていることになるがこれらの数字は大変流動的であって調査が進めばさらに変化するであろうと考えられる。ただ基本的にはこのような傾向は変わらないのかとも思われる。

#### 淡路島の甲虫相概観

淡路島の甲虫相はその産出記録の数からだけ見た場合、面積が県全体の 5.8 % 位しかないことからすれば種類数は必ずしも少ないとは考えられないが、地上性の種、落葉下とかに生息している種の調査が不十分だということはよくわかり、そういった方面の調査ができればもっと種類数が増えるであろうことからすれば面積の割りからすれば甲虫類は結構多くいるような印象を受ける。島内最高峰諭鶴羽山で海拔 608m、常隆寺山で 515m、先山 448m で見られるように高い山が無いことは森林性のものが大変少ないのではないかと、例えばカミキリムシ類のハナカミキリの仲間とかコメツキムシ科、オオキノコムシ科、ナガクチキムシ科、アカハネムシ科、ヒゲナガゾウムシ科などの甲虫記録がほとんど見られない、反面周囲が海に囲まれていることから海浜性、砂地等に棲息する種が多いということも淡路島甲虫相の大きな特徴だと思われる。オオヒョウタンゴミムシとかシロスジコガネ、スナゴミムシタマシ類などが豊富である。また全般からすれば南方系のものが多いようである。セスジユミアシゴミムシタマシ、ヒラズゲンセイ、フタイロカミキリモドキ、キイロミヤマカミキリなどを産することでもうかがえる。

現在の兵庫県産甲虫類の中で淡路島からのみ記録のある種は 37 種である。

前にのべたように未調査のグループを調べればまだまだその産出数は増加してくるであろうと思われるが、反面開発の方はかなりのスピードで進んでいる。特に海岸線の破壊はひどいようであり、そういった意味からすれば淡路島の甲虫相も変わりつつあるともいえそうである。

(たかはし としお)



# クロコノマチョウの飼育

谷川 大海<sup>2</sup>

筆者は前号(39号)でクロコノマチョウの採集について報告したが、母蝶に産卵させ、その一部を羽化させることが出来た。ここにその経過について報告する。

クロコノマチョウ飼育経過表(1993年)

| 番 号 | 1     | 2     | 3    | 4     | 5     | 6    | 7    | 8    | 9    | 10    | 11   | 12   | 13   | 14   | 15    |
|-----|-------|-------|------|-------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|
| 産卵日 | 7/23  | 7/23  | 7/23 | 7/23  | 7/23  | 7/23 | 7/23 | 7/25 | 7/25 | 7/25  | 7/25 | 不    | 不    | 不    | 不     |
| 孵化日 | 7/27  | 7/27  | 7/27 | 7/27  | 7/27  | 7/27 | 7/27 | 7/29 | 7/29 | 7/29  | 7/29 | 不    | 不    | 不    | 不     |
| 蛹化日 | 8/15  | 8/16  | 8/20 | 8/20  | 8/20  | 8/20 | 8/21 | 8/25 | 8/27 | 8/27  | 8/28 | 8/28 | 8/30 | 9/7  | 9/11  |
| 羽化日 | 8/24  | 8/24  | 8/25 | 8/26  | 8/29  | 8/29 | 8/31 | 9/4  | 9/6  | 9/6   | 9/7  | 9/8  | 9/12 | 9/18 | 9/23  |
| および | 7:00- | 7:00- |      |       |       |      |      |      |      |       |      |      |      |      |       |
| 時 間 | 7:45  | 7:45  | 不    | *8:30 | *8:30 | 9:20 | 6:20 | 朝    | 7:44 | 10:23 | 8:50 | 9:34 | 7:57 | 6:00 | 16:48 |
| 場 所 | 飼     | 飼     | 沼    | 沼     | 沼     | 沼    | 沼    | 林    | 林    | 林     | 林    | 林    | 林    | 庭    | 林     |
| 雌雄別 | ♂     | ♂     | ♂    | ♀     | ♀     | ♂    | ♀    | ♂    | ♂    | ♂     | ♂    | ♀    | ♂    | ♀    | ♀     |
| 食 草 | ジュ    | ジュ    | ジュ   | ジュ    | ジュ    | ジュ   | ジュ   | ス    | ス    | ス     | ス    | ス    | ス    | ジュ   | ス     |
| 型   | 夏     | 夏     | 夏    | 秋     | 秋     | 秋    | 秋    | 秋    | 秋    | 秋     | 秋    | 秋    | 秋    | 秋    | 秋     |
| 備 考 | 標     | 放     | 放    | 放     | 標     | 放    | 標    | 放    | 越    | 標     | 越    | 標    | 越    | 越    | 標     |

注：不=不明、飼=飼育箱、沼=「沼の林床」、林=「林の林床」、庭=庭の鉢植のジュズダマ、ジュ=ジュズダマ、ス=ススキ、夏=夏型、秋=秋型、標=標本、放=放蝶、越=越冬、\*=頃。

★ 飼育場所は、室内の飼育箱、庭の鉢植、「林の林床」、「沼の林床」の4ヶ所（「林の林床」、「沼の林床」は筆者が名づけたもの）。

★ 庭の鉢植：ジュズダマを掘ってきて、鉢に植えたもの。

★ 「林の林床」：白土山の一角にちょうど競技場のような大きさの空き地がある（直径約250mの円形）。昔、白土を陶土として堀り出した後だそうだ。競技場に見立てると、トラックの部分に樹木が、フィールドの部分に草が生えているという具合である。樹木の主なものは、ヤナギ、ハンノキ、アカメガシワ、ニレ、シロダモ、ハゼ、ネム、ハギ等。草の主なものは、ススキ、メドハギ、ノバラ、オカトラノオ、イグサ、クズ、ヨモギ、ヒエ等である。水気が多いので下にはミズゴケが生えている。この樹木の茂る一角に「林の林床」がある。この林床内の樹木は幅の広い葉のヤナギ、ハンノキ、ハゼノキ、ニレ等。下草はササ、ススキ等である。水路があり真夏でも水がたまっている。林床内はかなり暗い。

★ 「沼の林床」：「林の林床」から道をはさんで、南に約500m離れた所にあり、池の一角に位置している。この池の3分の1は水草に覆われており、この水草の縁にこの林がある。林床は7月半ばまでは水で覆われており、セリが一面に群生している。8月以降は水が引き、セリは葉を落として茎だけになる。セリの上には代わってタニソバが勢いを増して、一面に生える。この林床に生えている樹木はヤナギ、ハンノキなどである。林縁の一部にジュズダマが生えており、その一部が林床内にも見られる。

★ 標本：展翅して標本にし、筆者が保管している。

2): 〒656 洲本市大野 1018-2

- ★ 放蝶：羽化後、「林の林床」に放す。
- ★ 越冬：来年春に卵を得るために、飼育箱の中で越冬を試みる。

次に飼育について、飼育後気がついたこと、疑問に思ったことを記す。

- ★ 卵は母蝶を「沼の林床」のジュズダマに袋がけにして産卵させた。思ったより簡単で、7/22 午後に袋がけにし、7/23 朝には産卵する。7/22 は晴、室温 28 度、7/23 も晴、室温 26 度。43 卵を得る。この母蝶はこの後すぐに、もとの「林の林床」に放す。7/26 に「林の林床」のススキの葉裏から 13 卵を発見する。他に♀は目撃してないし、その以前には卵も見えていないので、これらの卵は放蝶した同じ母蝶が産んだと思われる。色や孵化日から推測して、産卵日は放蝶の 2 日後、7/25 と思われる。43 卵からは 14 匹の幼虫が孵化。13 卵からは 11 匹の幼虫が孵化した。しかし羽化したのは 14 匹からは 7 頭、11 匹からは 4 頭であった。
- ★ 食草はジュズダマとススキを使用。ジュズダマの方を好むようで、齢の若い時ほどジュズダマの方が成長が早かった。成虫の大きさもジュズダマの方が大きい。特に室内の飼育箱で、ジュズダマを使った 2 匹は順調に成長し、♂であったということもあったが、一番早く齢が進み、羽化も早かった。

- ★ 「沼の林床」と「林の林床」ではともに袋がけ飼育をした。若齢の時は複数袋がけにし、5 齢からは 1 匹ずつにした。1ヶ所だけ 5 齢で 2 匹を入れたのがあったが、その 1 匹の頭角状突起が 1 本になっているのを発見した。それ以後別々にしたが、この突起 1 本の幼虫も無事蛹化し、羽化した。

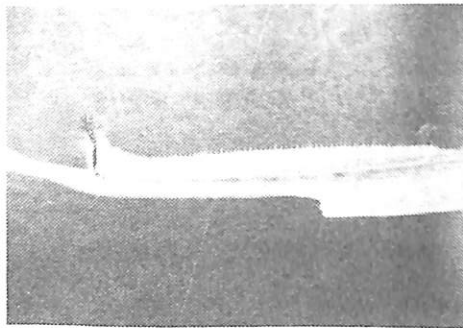


番号 7 番「沼の林床」で、ジュズダマで袋がけ飼育。8 月 13 日撮影 (5 齢)。

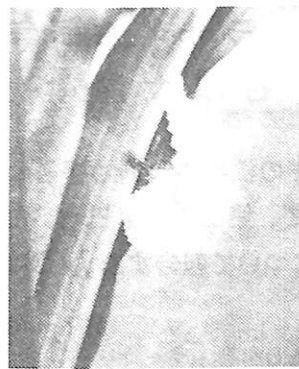
2 匹一緒に袋がけ飼育飼育していたのだが、他の幼虫と争って、角状突起を 1 本失ったものと思われる。

- ★ 型について。1 番から 3 番までが夏型の♂、以後羽化したのは全部秋型だった。同じ母蝶の卵で、孵化日も同じ、食草も同じ、気象条件もだいたい同じだと思われるのに、なぜ夏型と秋型が現れるのか。ススキ飼育のものはすべて秋型なので、全体を通じては秋型と言える。夏型の♀は現れなかった。当初は夏型が羽化したら、それに産卵させて秋型を得られればと思っていた。なぜこのようになるのかは疑問である。
- ★ 12, 13, 14, 15 番は飼育途中で、「林の林床」内でススキから発見した自然状態の幼虫である。その後、袋がけ飼育した。「沼の林床」からは自然状態の卵も、幼虫も見られなかった。

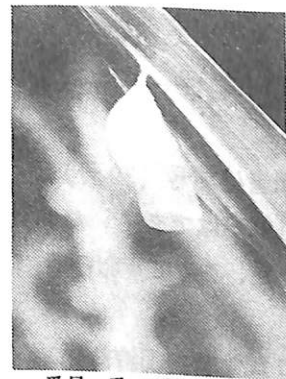
- ★ 、こに「林の林床」と「沼の林床」のちょうど中間地点でススキの葉裏から4齢幼虫1匹を発見した。袋がけをしていたが、5齢になった時逃げられてしまった。この林床では、この発見の数日前にボロボロの成虫♀1頭を採集している。ここから「沼の林床」までは成虫が楽に飛んで移動できる距離である(約150m)。「沼の林床」は見た目にはクロコノマチョウのすみかとしては理想的だと思われる。樹木は大きく、林床内は十分暗く、食草のジュズダマは豊富にある。ヤナギの木には樹液が出ている。しかしここには、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ、キタテハ、キアゲハ、コムラサキ、ウスイロコノマチョウなどは見かけたがクロコノマチョウの成虫は見られなかった。越冬地として適当でないのかも知れない。あるいは天敵がいるのかも知れない。とにかくこれも疑問の一つである。
- ★ 飼育箱の中の1番、2番の2匹は終齢では体長がそれぞれ58mm、62mm、蛹は長さがそれぞれ22mm、23mmであった。ススキ飼育では終齢の体長が一番長いもので60mmであった。ススキ飼育では若齢幼虫の時は成長が遅々としていたが、終齢幼虫になってからは順調に成長し急に大きくなった。
- ★ 羽化時間について。1、2番は蛹化日がそれぞれ8/15、8/16だったが、共に蛹が黒くなったのは深夜だった。さては夜に羽化するのかと待っていたが、結局翌朝だった。15番以外の羽化は午前中であった。



番号2番. 8月9日  
終齢(5齢)になった直後.  
体長43mm.



番号2番. 8月15日  
10:00 a.m. 撮影. 前蛹.



番号1番. 8月15日  
10:00 a.m. 撮影. 蛹  
長さ:22mm 幅:9mm 高さ:10mm.

- ★ 15番について。秋型♀にしては小さい個体だった。蛹の時も小さかったが、羽化の時、黒くなってから羽化するまでの時間が他のものよりも長かった。また、羽化し始めてから羽が伸びきるまでの時間も長かった(残念ながら具体的な数字は測っていないので分からず)。蛹と成虫の大きさの比較を次に示す。

| 個体の<br>番 号 | 蛹    |      |      | 成 虫  |      |    |       |
|------------|------|------|------|------|------|----|-------|
|            | 長さ   | 幅    | 高さ   | 横    | 縦    | 雌雄 | 食 草   |
| 15         | 18mm | 7mm  | 8mm  | 64mm | 50mm | ♀  | ススキ   |
| 7          | 23mm | 10mm | 11mm | 83mm | 63mm | ♀  | ジュズダマ |

どうして 15 番だけがこのように小さいのか分からないが、これを発見したのは、「林の林床」の林縁だった。日光のさしているススキの葉裏で、ウスイロコノマチョウの卵や幼虫がいないか捜している時に見つけた。見つけた時は 4 齢だったので、小さいのには気にとめなかった（ススキで育った幼虫は 5 齢までは小さかったから）。発見後は他の幼虫と共に林床内のススキで袋かけ飼育をした。

★ 蛹は羽化一日前に飼育箱に取り入れて羽化を観察できるようにした。幸運にも数頭の羽化シーンを観察できた。全ては標本にしていなかったので、翅裏の色しか比較できないが、同じ♀でも個体差が見られた。



番号 2 番. 8 月 29 日 9:20 a.m. 羽化.  
♂羽化直後撮影.

(たにがわ だいかい)

## コムラサキの飼育

谷 川 大 海<sup>2</sup>

筆者は前号 (39 号) でコムラサキの採集について報告したが、観察の結果食樹を特定でき (同定はできていない)、卵も得て、第二化と第三化、合わせて 4 頭を羽化させることができた。ここに産卵行動、飼育経過について報告する (4 頭をそれぞれ A, B, C, D とする)。

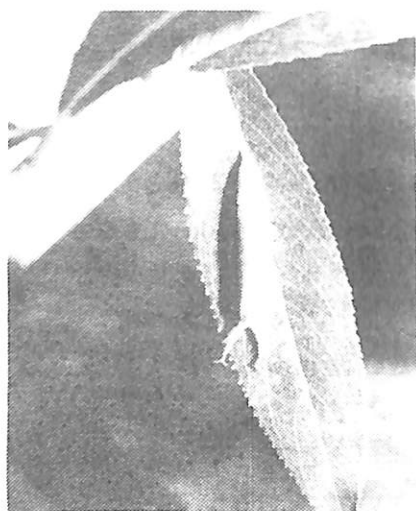
コムラサキ飼育経過表 (1993 年)

| A 第 2 化 | 卵期                        | 幼虫期 1 齢-5 齢 | 前蛹   | 蛹期   | 羽化        |
|---------|---------------------------|-------------|------|------|-----------|
| 月日      | 7/14                      | 7/21-8/25   | 8/26 | 8/27 | 9/3       |
|         | 7/20                      |             |      | 9/2  | ♀<br>6:50 |
| 日数      | 7                         | 36          | 1    | 7    | a.m.      |
| 備考      | 終齢幼虫の体長：38mm<br>蛹の体長：28mm |             |      |      |           |

| B 第3化 | 卵期           | 幼虫期 1 齡-5 齡 | 前蛹  | 蛹期          | 羽化                        |
|-------|--------------|-------------|-----|-------------|---------------------------|
| 月日    | 8/7<br>8/12  | 8/13-9/4    | 9/5 | 9/6<br>9/14 | 9/15<br>♂<br>8:20<br>a.m. |
| 日数    | 6            | 23          | 1   | 9           |                           |
| 備考    | 終齢幼虫の体長：41mm |             |     |             |                           |

一緒に飼育した C♂ (3 化) も同じ経過だった。

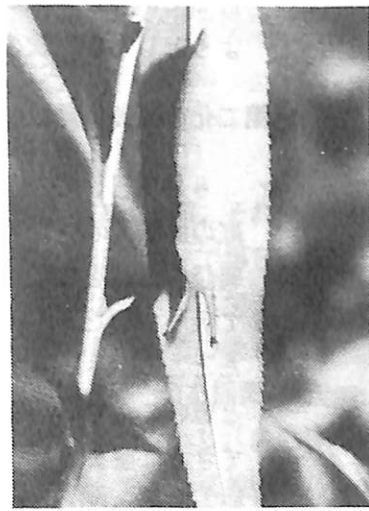
| D 第3化 | 卵期           | 幼虫期 1 齡-5 齡 | 前蛹   | 蛹期           | 羽化                        |
|-------|--------------|-------------|------|--------------|---------------------------|
| 月日    | 8/7<br>8/12  | 8/13-9/10   | 9/11 | 9/12<br>9/18 | 9/19<br>♀<br>7:00<br>a.m. |
| 日数    | 6            | 29          | 1    | 7            |                           |
| 備考    | 終齢幼虫の体長：43mm |             |      |              |                           |



C. 8月26日撮影.  
体長25mm.3 齡.



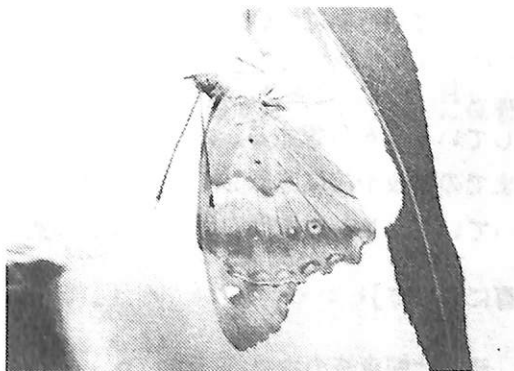
A. 8月25日 (前蛹になる  
1 日前). 角の先までの体長  
:43mm.(角状突起を含めない場  
合38mm).



A. 8月26日16:20 p.m. 撮影  
体長:35mm(角の先まで)葉裏に  
頭を下にして中脈に沿って垂下  
している.



A. 蛹.9月2日撮影.(羽化1日前)



C. 9月15日 7:15 a.m. 羽化.  
♂ 羽化直後に撮影.

### 【第一化の産卵行動について】

- ★ 7月14日，くもり，午後雨，室温 27 度．第一化の成虫はほとんど姿が見えない時期になっていた．この日まで観察を続けていたが，♀が樹液を吸っている姿は目撃したが，産卵行動は見る事が出来なかった．時期が遅れているので諦めかけていた．午後一時．強風と言っていいほどの風が吹いており，雨もバラバラしはじめた．母蝶がヤナギの木に向かって飛んでいるのだが，なかなか到達出来ないでいた．ちょうどその時に出くわした．やっとヤナギの木にとりついた．まさか産卵をしているとは思わなかった．腹部を曲げているのが分かった．しかしその後も母蝶は動こうともしない．雨も降ってきている．写真を撮るためにフラッシュをたいともびくともしない．ネットインして，ヤナギの葉表を調べてみると緑色の卵が葉表に産付してあった．感動の一瞬だった．この母蝶を別の枝に袋がけにしてさらに卵を得ようとしたが，次の日にネットの中で死んでいた．最後の産卵だったようである．

### 【第二化の産卵行動について】

- ★ 8月7日，雨，室温 26 度．2 日前に採集した少し傷んだ♀を産卵させようとして庭の鉢植えのヤナギに袋がけにしてあった．この 2 日間は空しく過ぎていたのだが，朝袋の位置を変えてブドウの腐果を吸わせてあった．この日はうまく口吻を伸ばして吸っていた．午後 5 時頃，葉表を調べてみたが卵はなかった．だめかと思っていたところ，ネット上に何か黒い点が見えた．なんと卵だった．産むのは食樹に直接と思いこんでいたので以外だった．2 卵，3 卵と合計 5 卵産んであった．嬉しくなつてさらに産ませようと次の日まで袋がけを続けた．つぎの朝見ると支柱の竹に 2 卵産んであった．昨日あれから産んだものと思われる．風が吹いて雨が降っていた．
- ★ 8月8日，午後 1 時．♀を採集に行く．幸運と言おうか母蝶がヤナギの木の中で産卵している．今産付した場所に登って見ると，細い枝の分岐部に緑の卵が 1 個産み付けてあった．やっとこのシーンに巡り会えた．袋がけをしていると，先ほどの母蝶が目前の葉表に産卵した．この日もしぐれたりしてあまり天気はよくなかった．風が少しあった．室温 27 度．

### 【第三化の産卵行動について】

- ★ 9月19日，くもり，室温 26 度．午後 1 時すぎ「沼の林床」のヤナギの木で産卵している♀を目撃する．木の中を飛び回りながら，6m 以上もある梢から下のほうまでの葉表や枝に産卵している．第二化の産卵行動とよく似ていた．小雨がばらついていた．しかし風は吹いていなかった．

### 【飼育について】

- ★ 初めは飼育箱の中で行っていた．しかしこの”幅の狭い葉のヤナギ”は極端に水あげが悪く，毎日新鮮な葉と取り替えねばならなかった．池の周囲には小さい株もかなり生えていたのでこれを鉢に植えて利用することにした（この近くの人に，こ



のヤナギは折れ易いが挿し木も簡単であると教えてもらった)。2週間ほどで新しい芽が出てきて利用できるようになった。しかし自然状態では(観察を続けたのだが)卵も幼虫も発見することが出来なかった。枝が折れ易く、脚立を使って捜してみたのだが、6mを越す木もあり、卵を得てからは諦めてしまった。

- ★ 第二化の産卵でネット上に産んだ卵5個と竹の上に産んだ卵2個の合計7卵からは5匹の幼虫を得ることが出来た。自然状態の卵も2個得ていたのだが1匹袋をかけたまま台風で飛ばされてしまった。結局6匹の幼虫を飼育し始めた。半分の3匹は自然状態で飼育しようと池のヤナギで袋がけにしていたのだが、台風のためか、子供のいたずらのためか、袋がはずれていて駄目になってしまった。

(たにがわ だいかい)

## ウスイロコノマチヨウ飛び来る 谷川 大海<sup>2</sup>

9/1に「沼の林床」で♀一頭(♂は目撃のみ)、9/2に「林の林床」で♂一頭、それぞれを共に早朝まだ露の残る林縁で採集した(どちらも夏型)。9/3に「沼の林床」で再び♂を目撃する(9/1に見たのと同じかどうかは分からず)。これらの林床はクロコノマチヨウの飼育で観察を続けていたので、これらは他から飛来したものと思われる。この後も観察を続けていたが、9/19になって「林の林床」の林縁で、午後1時頃、♂一頭を採集した。この♂が9/3に再度目撃したものかどうかは分からないが、新鮮な個体でないし、「林の林床」は「沼の林床」の北約500mにあることを考えると、同じ♂が飛んで来た可能性はある。なお9/1に採集した♀から卵を得ている。結果を次号で報告できればと思っている。

(たにがわ だいかい)

## 淡路島未記録の蜂類 大草 伸治<sup>3</sup>

筆者はここ数年淡路島で昆虫を採集してきました。今回は蜂類の中でいくつかの島内未記録と思われる種をここに報告します。なお標本は自然環境研究所(NSI)<sup>4)</sup>に保管しています。

### Diprionidae マツハバチ科

ネズハバチ *Monoctenus nipponicus* TAKEUCHI

|          |    |                 |             |
|----------|----|-----------------|-------------|
| 津名郡東浦町白山 | 3♂ | 1991. 4. 20/ 3♂ | 1992. 4. 18 |
| 津名郡北淡町舟木 | 2♂ | 1992. 4. 23     |             |

3: 〒494 愛知県尾西市明地字丸川 41-10

<sup>4)</sup>兵庫県津名郡津名町人町畑 235

ネズハバチは雄の触覚が羽状でいくつかの枝に別れています。4月ごろ食樹であるネズ *Juniperus rigida* の周辺を飛び回っているのが見られます。

#### Siricidae キバチ科

ニホンキバチ *Urocerus japonicus* (SMITH)

津名郡五色町龍宝寺 1 ex. 1991. 7. 23

キバチ科はカミキリムシのように材に穿孔します。ニホンキバチはマツ、スギなどを食害します。キバチ科の中では普通種で、大型の蜂です。

#### Cephidae クキバチ科

バラクキバチ *Syrista similis* MOCSARY

洲本市成ヶ島 1 ex. 1991. 4. 28

クキバチ科は植物の伸び始めた新梢に穿孔してこれを枯らします。バラクキバチはバラ類の新芽を食害します。淡路島からはほかにクロバクキバチが知られています。

#### Trigonalidae カギバラバチ科

キシセアカカギバラバチ *Poecilogonalos fasciata kibunensis* UCHIDA

津名郡五色町龍宝寺 1 ♀ 1991. 9. 4/ 1 ♀ 1992. 5. 19

カギバラバチ科の仲間は日本からは8種が記録されていますが、従来淡路島からは記録されていませんでした。カギバラバチ類は寄生蜂ですが、寄生の方法が少し変わっています。雌は卵を葉の縁に数千から万に近い数を産みつけます。その卵と一緒に葉を食べたハバチの幼虫の体の中で大きくなるのです。産卵に関しては野坂氏が「エソカギバラバチ」に関して詳しく記録されています。

カギバラバチはそんなに珍しい蜂ではありませんが、あまり大きな蜂ではないことと、木や草の葉の間を飛ぶので、目立たないと思いますが、時期と場所さえよければ採集は難しくないと思います。以上の科はそれぞれ小さな科でクキバチ科を除いて淡路島からは初めてと思われるのでここに発表します。

末筆ながら発表に際して種々御教示いただいた登日邦明氏に篤くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- [1] 野坂千津子 1976 「エソカギバラバチの産卵観察」 蜂友通信 (3)

(おおくさしんじ)

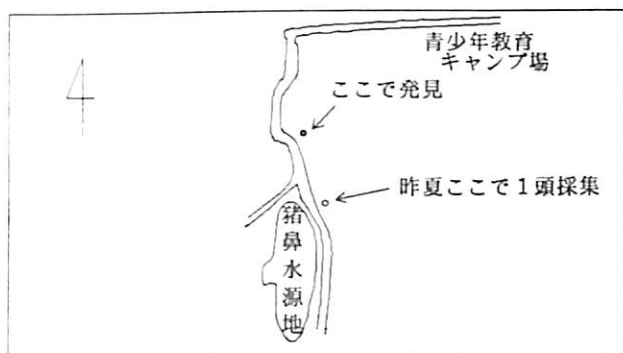
### 1993 年夏の成果 交 告 尚 史<sup>4</sup>

8月17日から同月21日まで淡路島で蝶の採集をした。主な成果を報告しておきたい。

1. イシガケチョウ 1頭発見 (採集には失敗)。

8月17日 p.m. 1:15 ころ 洲本市猪鼻

4: 〒225 横浜市緑区黒須田32-12 あさみ野405



2. ウスイロコノマチョウ 1頭採集（裏面の波状紋により夏型<sup>6</sup>と判断した）。

8月19日 p.m. 0:30 ころ 洲本市上内膳<sup>7</sup>。

下内膳郵便局の所からしばらく先山を目指して登ると左手に左手に上内膳へ降りる道がある。その道を下って、山を脱け出たあたりの路傍に小さなササ原があり、そこで、ウスイロコノマチョウを採集した。後翅が少々損傷している。

3. クロコノマチョウ 1頭採集。

8月20日 a.m. 11:20 ころ 洲本市竹原

柏原山林道の入口（民家が見えなくなる所）は竹藪になっているが、そこでクロコノマチョウを1頭採集した。翅はかなり破損している。

（こうけつひさし）

## 一宮町でイカリモンガを採集

大草 伸 治<sup>3</sup>

イカリモンガ *Pterodecta felderi* は昼飛性のガ類で、各地で普通に見られるが、なぜか淡路島からの記録はなかった。筆者は1993年10月15日、一宮町尾崎枯木において林縁を飛行する本種を採集することができたのでここに報告しておきたい。



（おおくさしんじ）

## コシロシタバの採集記録

堀 田 久<sup>5</sup>

コシロシタバ *Catocala actaea* の淡路島における記録例は少ないようである。筆者は昨年の8月に、自宅のガレージの壁に静止していた本種を採集したので、記録しておきたい。

5: 〒656 洲本市安乎北谷630

洲本市安乎町北谷, 1♀, 13.VIII.1993

なお標本は筆者が保管している。

(ほりたひさし)

## 1 月に活動するベニシジミ

堀 田 久<sup>5</sup>

筆者は本年(1994)1月2日に、洲本市安乎町北谷の自宅付近でシマカンギクの花で吸蜜中の、ベニシジミ *Lycaena phlaeus* (1♀)を確認したので報告しておきたい。近年暖冬の影響で、12月になってもベニシジミはよく活動しているが、成虫では越冬しない本種が1月に活動するのは希である。

なお、1987年1月3日にも、洲本市安乎町北谷で、活動中の本種を確認している。

(ほりたひさし)

## ツクツクボウシの遅い記録

登 日 邦 明<sup>6</sup>

ツクツクボウシ *Meimura opalifera* は、淡路島中部の津名町大町周辺では通常8月中旬に出現し、9月上～中旬には鳴き声が聞かれなくなるのだが、昨年('93)は冷夏の影響か、10月11日を過ぎても鳴き声が時おり聞かれたので、参考までに記録しておきたい。

(とびくにあき)

## 編集後記

▽ '94年度の1号目をお届けします。次号は夏～秋に発行を予定していますので、原稿をお寄せ下さい。

▽ 本年度の会費も2000円です。同封の振替用紙で早めにお願ひ致します。

(TB)

### PARNASSIUS No.40

1994年2月16日印刷

1994年2月21日発行

編集者 登日邦明

発行所 淡路昆虫研究会

〒656-21 兵庫県津名郡津名町大町畑235

郵便振替 神戸 7-49591

印刷所 れいめい社

〒656 兵庫県洲本市本町5丁目1-24

